

詩篇 118 篇を味わう

【新改訳改訂第3版】

1 【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。

2 さあ、イスラエルよ、言え。
「主の恵みはとこしえまで」と。

3 さあ、アロンの家よ、言え。
「主の恵みはとこしえまで」と。

4 さあ、【主】を恐れる者たちよ、言え。
「主の恵みはとこしえまで」と。

●「主を恐れる者たち」とは、神の約束を信じて、神を信頼する者たち。

5 苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。
【主】は、私に答えて、私を広い所に置かれた。

●「広い所」=安全な場所

6 【主】は私の味方。私は恐れない。
人は、私に何ができよう。

7 【主】は、私を助けてくださる私の味方。
私は、私を憎む者をもとのもしない。

●「身を避ける」(「ハーサー」)は信頼を意味します。
人の助けは空しいのです。

8 【主】に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。

9 【主】に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。

●「取り囲んだ」・イスラエルの民は敵によって何度も取り囲まれています。「すべての国々」とは、エジプト、アッシリヤ、バビロン、ギリシア、ローマ、反キリストの軍勢です。

10 すべての国々が私を取り囲んだ。(※) 確かに私は【主】の御名によって(※)、彼らを断ち切ろう。

●「主の御名によって」(ベシェーム・アドナイ)
これはどんな敵をも倒すことのできる武器です。

11 彼らは私を取り囲んだ。まことに、私を取り囲んだ。確かに私は【主】の御名によって、彼らを断ち切ろう。

●「断ち切ろう」=神への信頼によって逆境を乗り越えようとする決意を示します。

12 彼らは蜂のように(※)、私を取り囲んだ。しかし、彼らはいばらの火のように消された(※)。確かに私は【主】の御名によって、彼らを断ち切ろう。

●「蜂のように」・敵の数的優勢さを表わします。

13 おまえは、私をひどく押し倒そうとしたが、【主】が私を助けられた。

●「いばらの火のように消された」とは、枯草が燃えるように一瞬のことで表わします。ヒゼキヤの時代、エルサレムは18万5千人のアッシリヤの軍勢によってエルサレムが取り囲まれましたが、一夜にして滅びました。

14 主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなりました。

●14節は出エジプト記15章にもあります。。

15 喜びと救いの声は、正しい者の幕屋のうちにあ
る。【主】の右の手は力ある働きをする。

16 【主】の右の手は高く上げられ、
【主】の右の手は力ある働きをする。

17 私は死ぬことなく、かえって生き、そして【主】
のみわざを語り告げよう。

**18 主は私をきびしく懲らしめられた。しかし、私
を死に渡されなかった。**

19 **義の門**よ。私のために開け。私はそこから入り、
主に感謝しよう。

20 これこそ**【主】の門**。正しい者たちはこれより
入る。

21 私はあなたに感謝します。あなたが私に答えら
れ、私の救いとなられたからです。

**22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石に
なった。**

**23 これは【主】のなさったことだ。私たちの目には
不思議なことである。**

**24 これは、【主】が設けられた日である。この日
を楽しみ喜ぼう。**

25 ああ、【主】よ。どうぞ救ってください。ああ、
【主】よ。どうぞ栄えさせてください。

**26 【主】の御名によって来る人に、祝福があるよ
うに。**私たちは【主】の家から、あなたがたを祝
福した。

27 【主】は神であられ、私たちに光を与えられた。
枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のとこ
ろまで。

28 あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。
あなたは私の神、私はあなたをあがめます。

29 **【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深
い。その恵みはとこしえまで。**

●「主の御名によって来る人」とは、本来、神に選ばれ
た者のことを意味しましたが、後に、イエシュアにあ
てはめられました。

●新共同訳は「祭壇の角のところまで／祭りのいけにえ
を網でひいて行け。」と訳しています。

ベレーシート

●詩篇 118 篇は 15 の「メシア詩篇」を総括するのにふさわしい詩篇です。この詩篇 118 篇がメシア詩篇と呼ばれるのは、新約聖書の多くの箇所引用されているからです。特に、22 節の「**家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。**」は、以下の箇所に引用されています。

- ①マタイの福音書 21 章 42 節。
- ②マルコの福音書 12 章 10～11 節。
- ③ルカの福音書 20 章 17 節。
- ④使徒の働き 4 章 11 節。
- ⑤エペソ書 2 章 20 節。
- ⑥ I ペテロ 2 章 7 節。

●また、26 節の「**主の御名によって来る人に、祝福があるように。**」は、以下の箇所に引用されています。

- ①マタイの福音書 21 章 9 節。
- ②同、23 章 39 節。
- ③マルコの福音書 11 章 9 節。
- ④ルカの福音書 13 章 35 節。
- ⑤同、19 章 38 節。
- ⑥ヨハネの福音書 12 章 13 節。

●ちなみに、「**主の御名によって来る人に、祝福があるように。**」の「バルッフ・ハバー・ベシェーム・アドナイ」は、現代では「よくいらっしゃいました。主の御名によって祝福します。」という挨拶用語として使われているようです。しかし新約聖書では、「主の御名によって来る人」とは御子イエシュアのこととして解釈され、ヨハネの福音書 12 章 13 節では「イスラエルの王」としてのイエシュアとして解釈されています。

●詩篇 118 篇は「エジプト・ハレル詩篇」(113～118 篇)の最後の詩篇でもあります。このまとまった詩篇グループは、ユダヤの三大祭である「過越の祭り」「七週の祭り」「仮庵の祭り」の際に歌われたようです。したがって、イエシュアが最後の晩餐で弟子たちと共に歌ったのは、この「エジプト・ハレル詩篇」だったと言われています。なぜ、「エジプト・ハレル」なのかと言えば、詩篇 114 篇の冒頭に「イスラエルがエジプトから、・・出て来たとき」とあるからです。六つの詩篇から成る「エジプト・ハレル詩篇」の特徴は、いずれも主の卓越性を主題としています。ですから、「セレブレイト・スッコート」での瞑想にぴったりという事になります。

●詩篇 118 篇は大きく三つの部分から成っています。

- (1) 賛美への呼びかけ(1～4 節)・・・【人称なき存在】
- (2) イスラエルの苦難の歴史(5～21 節)・・・【集合人格としての「私」】
- (3) メシアによる最終的な救い(22～29 節)・・・【イスラエルの民(22～27 節)、集合的人格の「私」(28 節)、
人称なき存在(29 節)】

●詩篇 118 篇全体は冒頭と結部にある定型句「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」に挟まれる形となっています。

1. 定型句としての「ホドゥー・ラドナイ」

【新改訳改訂第 3 版】詩篇 118 篇 1 節

【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。

【新共同訳】詩編 118 編 1 節

恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに。

●新改訳と新共同訳を比較すると、新改訳は「いつくしみ」と「恵み」とあるのに対して、新共同訳は「恵み」と「慈しみ」と訳されています。原語は「トーヴ」(טוֹב)と「ヘセド」(חֶסֶד)であるにもかかわらず、日本語訳は全く逆のように訳されています。混乱を招きかねませんが、これらのことばを使うときには、分かち合う対象がどの聖書訳を使っているのかを考慮しながら、明確に意識して使う必要があります。

●「いつくしみ」の「トーヴ」(טוֹב)の英語訳は good、「恵み」(「ヘセド」חֶסֶד)の英語訳は love, constant love, steadfast love で、変わることはない愛、確固とした愛、不変の愛を意味します。

●「いつくしみ」と「恵み」は、しばしばワン・セットで用いられます。詩篇 23 篇の結論に、「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。」(23:6)とダビデは記しています。主は常に「良い方」であり、常に変わることはない愛をもってかかわってくださっていることを私たちは確信する必要があります。

●詩篇 118 篇 24 節に見られる「この日を楽しみ喜ぼう」にある「楽しみ」と「喜び」も、しばしばワン・セットで用いられます。ちなみに、新共同訳はその部分を「喜び祝い、喜び踊ろう」と訳しています。いずれも動詞が使われています。「楽しむ」(「ギール」גִּיל)ことと「喜ぶ」(「サーマハ」שָׂמַח)ことは、やがて完成される御国の基調です。「楽しみ」も「喜び」も、すでにキリストのよみがえりを通してこの世に種のように蒔かれています。しかしそれが最大限に開花するのはキリストの再臨の時であり、私たちはその時を待たなければならないのです。

2. 集合人格としての「私」

●個人が集団を代表するというのはヘブル的な修辞法です。詩篇 118 篇で登場する「私」は、まさにイスラエルの民全体を代表しています。たとえば、ネヘミヤはイスラエルの民の罪を自分の罪として告白しています。イザヤ書の「主のしもべ」は、イスラエルの民が本来果たすべき使命を代わりに果たす「しもべ」なのです。ちなみに、姦淫したゴメルもエフライム(北イスラエル)を代表している集合人格的存在です。

●詩篇 118 篇の「私」も、いつの時代においても繰り返し異邦の国々によって取り囲まれるイスラエルの民の代表的存在と言えます。

【新改訳改訂第3版】詩篇 118 篇 10～14 節

- 10 すべての国々が私を取り囲んだ。確かに私は【主】の御名によって、彼らを断ち切ろう。
- 11 彼らは私を取り囲んだ。まことに、私を取り囲んだ。確かに私は【主】の御名によって、彼らを断ち切ろう。
- 12 彼らは蜂のように、私を取り囲んだ。しかし、彼らはいばらの火のように消された。
確かに私は【主】の御名によって、彼らを断ち切ろう。
- 13 おまえは、私をひどく押し倒そうとしたが、【主】が私を助けられた。
- 14 主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。

●10 節の「すべての国々」とは、エジプト、アッシリヤ、バビロン、ペルシャ、ギリシアの国々を指すと同時に、将来的には「獣」と呼ばれる反キリストを指しています。歴史の終わりまで、神の民イスラエルは「取り囲まれる」運命にあるのです。反ユダヤ主義は歴史の流れの中で、絶えることなく台頭して来ました。そして、これからも台頭してくるのです。そのことが「私を取り囲んだ(10,11,11,12 節)」と表現されています。しかし、そうした「苦しみのうちから、私は主を呼び求めたことにより、主は、私に答えて、私を広い所に置かれた」(5 節)と告白しています。このことを 10 節では「確かに(まことに)私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。」(10, 11 節、12 節)と表現しています。

●反ユダヤ主義が台頭し、たとえどんなに打ち倒そうとしても、主の右の手は高く上げられ、力あるみわざがなされてきました。それゆえ、「私は死ぬことなく、かえって生き、そして主のみわざを語り告げよう」と語っています。このことはイスラエルの民だけでなく、キリストにある私たちにおいても真実です。使徒パウロが「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」(ローマ 8:31)と述べているように、圧倒的な勝利者となるのです。

3. 家を建てる者たちの捨てた「石」が要石となる

【新改訳改訂第3版】詩篇 118 篇 22～27 節

- 22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。
- 23 これは【主】のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。

24 これは、【主】が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。

25 ああ、【主】よ。どうぞ救ってください。ああ、【主】よ。どうぞ栄えさせてください。

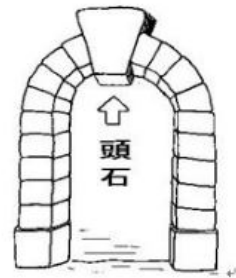
26 【主】の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは【主】の家から、あなたがたを祝福した。

27 【主】は神であられ、私たちに光を与えられた。

枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

●この箇所には、「**私たち**」という人称が登場します。おそらく、それは、イスラエルの民を代表する集合人格の「私」が、同族の民によって捨てられた「石」(単数)とされたからだと考えられます。要(かなめ)の石となったメシアを信じる者たち、神によって光を照らされた者たち、その者たちこそ、ここに登場する「私たち」だと言えます。

●ここでの「石」は単数の「エヴェン」(אֶבֶן)で、御子イエシュアのことを指し示しています。「捨てた」と訳されたヘブル語は「マーアス」(מָאָס)で、きわめて辛辣(しんらつ)な意味をもった語彙です。単に「捨てた」という意味ではこの動詞のもつ意味を正しく伝えていません。「マーアス」(מָאָס)は、忌み嫌う、吐き気を催すほどに嫌で、嫌でたまらないものとして扱う、断固として拒絶し、さげすみ、軽蔑することを意味します。ところがそのような「石」を神はご自身の家を建てる「要(かなめ)の石」とされたのです。このことは人間の目にはとても不可解なことであり、不思議な出来事なのです。イエシュアの十字架の死と復活はまさに人の目には不可解な出来事なのです。



●26節の「【主】の御名によって来る人(単数形)に、祝福があるように。」(「パールーフ・ハッパー・ベシエーム・アドナイ」 יהוה יהוה אלהינו)とあるのを、イエシュアは再臨するご自分に当てはめられました。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 23章 37～39節

37 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

38 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。

39 あなたがたに告げます。『**祝福あれ。主の御名によって来られる方に**』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。』

●「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」と言う前に、イスラエルの民(ユダヤ人)はイエシュアをメシアと信じるための「ヤコブの苦難」という未曾有の苦しみを経験し、「恵みと哀願の霊」を注がれることで、目が開かれる経験をするのです。それは使徒パウロが経験したように「天からの光」を与えられることによって、はじめて霊の目が開かれ、「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」という回心をするのです。その後、イエシュアは天から地上に戻って来られるのです。

2016.9.25

